

特集 インフラ整備  
世界に発信！  
日本の技術力



## 手編みのマフラーの宝物

from Syria シリア



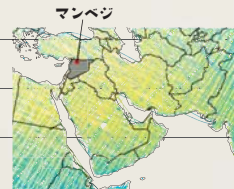
4年前、青年海外協力隊員としてシリアの保健局で活動していた時のこと。初めて現地で冬を迎える私に、同僚の助産師がこう声を掛けてくれた。

「私たちがマフラーを編んであげるわよ」

毎日、毎日、仕事終わりに何人もの優しい同僚の手によって編まれた真っ赤なマフラーは、私の一生の宝物になった。

私が知っているシリアは、そんな優しさと思いやりの気持ちにあふれ、平和な時間がゆっくりと流れていた。今は混乱状態が続き、電話もつながらず、かつての同僚の声を聞くこともできない。私が助産師を目指すきっかけをつくってくれた彼女たちは、シリアで生きている。いや、生きていてほしいと強く願っている。

いつかまた、平和になったシリアで一緒に働ける日が来ますように。そしてまた、家族みんなが食卓を囲めますように。シリアは私にとって第2の故郷だから。



撮影：中川智恵（シリア／青年海外協力隊OG）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。  
\*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

## Contents

02 my photo 手編みのマフラーの宝物 シリア

04 特集 インフラ整備

## 世界に発信！日本の技術力

安全・安心のドライブを スリランカ  
街と川をつなぐ橋 タイ  
地下から都市を支える インドネシア  
成長を続ける海の玄関口 ケニア  
世界が注目！ Made in JAPAN



18 JICA Volunteer Story 森田 章一 シニア海外ボランティア／コロンビア／プラスチック加工技術

20 PLAYERS

## 栄養改善で子どもたちの 健やかな成長を

NPO法人ISAPH



22 世界とつながる教室 グローバルな視点で羽ばたく 山梨英和中学校・高等学校

24 JICA STAFF 小柳 桂泉 JICA社会基盤・平和構築部 運輸交通・情報通信グループ 兼 計画・調整課

25 JICA UPDATE

26 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説！

28 Voice 渋谷 敦志 フォトジャーナリスト

30 地球ギャラリー

## イラン ペルシャの誇り



37 イチオシ！ 本・映画・イベント

39 MONO語り コットンが生み出す未来

40 私のなんとかしなきゃ！ バックン タレント



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：久野真一

1983年に日本の協力で完成したコンゴ民主共和国のマタディ橋。日本と現地の技術者が共に建設に取り組み、両国の友好の象徴となっている





特集 インフラ整備

# 世界に発信！ 日本の技術力

道路、橋、電気、水道…。  
私たちの生活の基盤をつくっているインフラ。  
開発途上国がさらなる成長を遂げるために、  
インフラ整備の現場で日本のさまざまな技術が生かされている。

編集協力：横尾賢一郎 一般社団法人日本経済団体連合会 国際協力本部長

## 成長のネックとなる インフラ整備の遅れ

蛇口をひねれば、いつでも水が出る水道。通勤・通学に使うバスや電車。夜道を照らす街灯、安全に通行できるように舗装された道路…。私たちの日々の生活を支えるこれらのインフラ。先進国である、開発途上国であれ、世界中どこでも、国づくりの柱として重要な役割を果たしている。

日本においても、もちろんそう。第二次世界大戦後、大規模なインフラ整備を進めてきた日本。国際社会からも多くの支援が寄せられ、終戦後の1950年代から60年代にかけて、東海道新幹線、東名高速道路、各地の電力設備など、世界銀行から融資を受けて造られたインフラは31件。その恩恵を受けて見事復興を遂げ、日本の技術者により維持管理されてきたインフラは、今も現役として活躍中だ。

経済成長の真ただちにある途上国でも、インフラは最重要課題の一つだ。しかし成長のスピードがあまりにも速く、その整備が追いついていない。人口が集中している都市の道路は常に大渋滞、電

気や水道の普及率も低いまま…。  
そう簡単に事は運ばないのが現実だ。

インフラは何を造るにも規模が大きく、時間も手間もかかる。戦後の日本がそうであったように、資金や技術者が足りず、自国の力だけで進めていくには限界がある。そこで、途上国が力を借りたいと思っているのが先進国。世界でも指折りの技術力を誇る日本もその一つだ。実際にこれまで、世界各地でさまざまなインフラの整備に貢献してきた。

「日本企業の海外展開は、途上国はもちろん、日本経済の活性化にもつながります」。そう話すのは、一般社団法人日本経済団体連合会の横尾賢一郎・国際協力本部長。「アベノミクスの効果もあり、日本の景気も上向きになってきています。企業としてステップアップを図るために、とりわけ最近では中小企業が東南アジアなどでの

日本企業が工事を担当しているベトナムの首都ハノイのニャタン橋は円借款の支援によるもの。市内の渋滞解消への貢献が期待されている  
(撮影：高橋智史)





## ケニア Kenya



### 自然に優しいエネルギー開発

首都ナイロビから北西に約120キロ、豊富な地下資源を有するオルカリアで地熱発電所を建設中。豊田通商株式会社が受注し、株式会社東芝が納入したタービンを使用。電力需要が増しているケニアで、再生可能エネルギーを通じた発電能力向上に貢献している。

アフリカ東部の玄関口であるモンバサ港の拡張工事を実施中。日本の港湾運営のノウハウを学ぶ研修も行われている。

→ 14ページへ



©Shinichi Kuno

## インド India



### いつでもどこでもスムーズに移動

車やバイクがひしめく首都ニューデリーでは、渋滞緩和の手段としてデリーメトロの建設が進行中。三菱電機株式会社の電力回生ブレーキや日本信号株式会社の信号通信システム、東京メトロの安全対策などが結集した世界でもトップレベルの都市鉄道だ。

## ベトナム Viet Nam



### 空の玄関口を拡大

観光客やビジネスマンなど利用者の増大を受けて、首都ハノイのノイバイ国際空港で第2ターミナルビルの新設工事を大成建設株式会社が担当。手荷物の受け取り時間を短縮するためにターンテーブルが倍増され、最新の旅客手荷物処理装置が導入される他、JICA・国土交通省・日本国内の空港会社など官民が連携し、空港運営・維持管理をサポートしている。

## タイ Thailand



バンコク首都圏の渋滞解消を目指し、チャオプラヤ川にタイ初のエクストラード橋を建設中。

→ 10ページへ

## インドネシア Indonesia



下水道整備の遅れが目立つ首都ジャカルタで、地下を掘り起こさず下水道管整備を進める技術を移転中。

→ 12ページへ

## スリランカ Sri Lanka



コロンボと南部をつなぐ大動脈である高速道路の渋滞や事故を減らすため、日本の交通管制システムを普及中。

→ 8ページへ

## イラク Iraq



### 急増する電力需要に対応

長年の紛争や経済制裁により老朽化が進んでいる発電所や送配電施設を修復中。株式会社明電舎が製造した移動式変電設備が導入されるなど、日本の技術力が電力供給の安定化と経済・社会復興に寄与している。

## 世界に広がる 日本のインフラ技術



## ホンジュラス Honduras



### 災害に強い橋を造る

主要幹線である国道20号線と中米道路網13号線上に位置し、陸上輸送の要となる2つの橋を株式会社安藤・間が建設。ハリケーンや地震などが発生した際も最小限の被害で済んだ頑丈なもの。現在は地震により損傷した部分の補修工事を実施中。

## オールジャパンで 取り組むインフラ整備

こういった流れの中で、日本が近年打ち出しているのは、インフラそのものを造るだけでなく、設計から施工、維持管理や運営方法まで、その全プロセスを包括的に支援していくという方針。内閣官房長官が議長を務める「経協（経済協力）インフラ戦略会議」を日本政府は定期的に開催するなど、この新たな挑戦を後押ししている。

それを実践する上でタッグを組んでいるのが、途上国で豊富な事業経験とネットワークを持つJICAと、長年の実績に裏付けされた技術力を持つ民間企業や地方自治体。円借款や無償資金協力を通じて整備するインフラを、日本の技術力で使い続けられるものにしていく。インフラはそこに、あるだけでなく、適切に維持管理され、安全に長く使われることが大切だからだ。

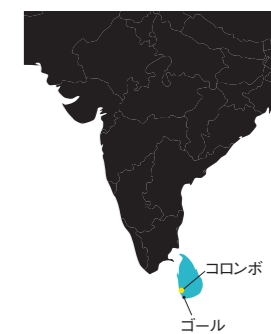
想像を超えるスピードで発展を遂げている多くの途上国。インフラ整備が追い付かず、より窮地に追い込まれるのは草の根レベルの人々だ。一人でも多くの人が一刻も早く、経済成長の恩恵を肌で感じながら豊かな生活を送ることができるよう、日本ができることはたくさんあるはずだ。「日本のインフラ整備の技術を包括的なシステムとして発信していくことで、途上国での日本のプレゼンスもより高まっていくのではないでしょう」と横尾さんは期待する。多くの自然災害を経験した日本ならではの防災分野の協力への期待も高まっている。

日本の先人たちが培ってきた技術とノウハウ。それらが今、海を超えて大きく羽ばたき、新たなうねりを生み出そうとしている。





from スリランカ  
**Sri Lanka**



高速道路建設で  
地域を活性化

スリランカ南部の港町ゴール。かつてポルトガルとオランダの交易拠点として栄え、当時の面影が

安全・安心のドライブを

スリランカの最大都市コロンボと観光都市ゴールを結ぶ南部高速道路。事故や渋滞の情報をいち早く運転手に伝え、安全を確保するため、日本の技術者たちが奮闘している。



南部高速道路の建設を率いる堀川さん。現場は地盤がゆるく、技術的に苦労も多かった（撮影：谷本美加）

残る城壁と街並みは、世界遺産に登録されている。海外からも多くの人々が訪れる人気観光スポットの一つだ。

2004年からスリランカに駐在し、中部の都市キャンディで上水道整備に携わっていた大成建設株式会社の堀川祐毅さんも、週末に観光でゴールに出掛けたことがある。しかし、その旅路は決して楽ではなかった。「コロンボからゴールまでは約100キロあるの

ですが、海岸沿いの1車線の道路が唯一の道でした。渋滞がひどくて、車で6時間も揺られていました」。観光客を運ぶだけでなく、地元の人たちにとって物流を支える重要な

道路だけに、早急に改善が必要だと感じた。

そこで07年から、コロンボとゴールを結ぶ総延長96キロ、片道2車線の南部高速道路の建設が始まった。日本が担当するのは、そのうちの67キロ。堀川さん率いる大成建設が、施工を請け負うことになった。建設現場は湿地も多く、水分を吸い上げて地盤を強化しながら工事を進める必要があった。

「この道路はスリランカと日本の絆をつなぐ道にもなる。そう考えるとどんな苦労も吹き飛びました」と堀川さんは振り返る。そして2011年11月、南部高速道路は無事開通。コロンボからゴールまでは、車で1時間半〜2時間で行けるようになり、ゴールへの観光客が2、3倍に増えた。インターチェンジ近くには工業団地もでき、地域経済の活性化に貢献している。



2012年11月、南部高速道路で発生した土砂崩れ。RDA職員が事前に斜面の亀裂を発見し、道路を封鎖したため難を逃れた

道路上の変化を  
いち早くキャッチ

現地に劇的な変化をもたらした南部高速道路だが、周辺に延びる道路が次々に整備され、交通量が増え続けている。

そうなるに気になるのが、安全性だ。高速道路に事故や渋滞は付き物。万が一トラブルが発生した時、いち早く周囲の運転手に状況を知らせ、二次被害を防がなければならぬ。

しかし、南部高速道路を管理するスリランカ道路開発庁（RDA）の体制には改善の余地があった。ある日、トラックの荷台から路上に荷物が落下した時のこと。近くを走る運転手から通報を受けたRDA職員がパトロール車で現場に向かい、状況を確認。車上の掲示板で、周囲の運転手に状況を伝えた。幸い事故には至らなかったが、落下物が発生してから情報の伝達までに30分かかった。

この時間を短縮し、高速道路の安全を確保しようとRDAが目をつけたのが、日本の交通管制システムだった。日本の高速道路では、道路脇に監視カメラや交通量を測る機器が設置され、問題発生を確認してから、わずか5分で電光掲示板に情報が流れる仕組みになっている。

2014年1月、交通管制シス

テムの整備に積極的に取り組む三菱重工工業株式会社の社員がスリランカ入り。RDA職員と導入に向けて議論を始めた。「システムの誤操作があった場合、責任の所在が分かるように操作員に割り当てたIDを記録したいなど、日本の設計では考慮しないことを要望されたこともありまして」と三菱重工ICTソリューション本部主席技師の武市義典さん。それでもRDA職員の意見をできるだけ取り入れ、スリランカ用にシステムを改良した。

計画では、延伸部分を含め約120キロにわたり、高速道路上の車両をカウントするカメラを41台、天候を把握するための雨量計を11台設置し、そこから得られた情報を分析する交通管制室を整備。さらに、道路上に電光掲示板を21台建て、事故や渋滞、速度制限などの情報を発信する。現在、各機材の取り付け工事が進められ



電光掲示板の設置予定地で、基礎工事の状況を確認する三菱重工の社員と現地の技術者

ベトナムの首都ハノイの高速道路では、すでにパナソニックシステムネットワークス株式会社が交通管制システムを整備。モニター右にカメラの映像、左に事故や渋滞などの交通状況が表示される



ているところだ。

「スリランカの車の大半は日本車。日本の技術への信頼がさらに増すような交通管制システムを整備していきたい」と武市さんは意気込む。今年の年末ごろに工事は完了する予定。その後、RDA職員にシステムの操作方法を伝える研修を行い、来年3月には運用を開始する。

高速道路の建設から安全管理まで。日本のインフラ技術がスリランカの明るい未来を切り開いていく。

「前方で事故発生。制限速度50キロ」。南部高速道路に設置される予定の電光掲示板。英語だけでなく、現地語のシンハラ語とタミル語で表示する





現地で施工管理を担当する三井住友建設の小藤吉仁さん(右)とタイの技術者(撮影：久野真一)

「今日は家に帰るまで2時間もかかっちゃったよ」  
「でも、ここを通らないと家に帰れないから」  
そんな会話は日常茶飯事。渋滞が起これば、当然、ヒトやモノの流れが滞る。産業の活性化にも影響が及んでしまう。  
その解決のカギを握るのが、街を縦断するチャオプラヤ川だ。ここに橋を架けることで新たな車の流れを生み出せば、周辺の渋滞緩和に大いにつながる。世界でもトップクラスの橋の建設技術を誇る日本は、これまでタイの発展に貢献すべく、チャオプラヤ川の20の橋のうち13の建設を円借款で支援してきた。

そして今、さらにもう一本、日本の協力で新たな橋の建設が進められている。設置場所は、バンコク中心部から北に30キロのノンタブリ県。市内から延びる都市鉄道の建設も進んでおり、首都のベッドタウンとして人口増加が進んで

### 日本の技術が凝縮した橋を架ける

全長460メートルの橋の建設を手掛けるのは、三井住友建設株式会社だ。これまで同社がチャオプラヤ川に架けた橋は8つ。現地に駐在しているプロジェクトマネージャーの高橋克行さんは15年以上、インドネシア、フィリピン、ベトナムなど、海外での橋の施工管理に従事してきたという頼もしい存在だ。  
そんな高橋さんたちは今、新た

いる地域だ。それ故に、車の渋滞も悪化していた。

な挑戦をしている。「エクストラードロード」という、タイ初となる形式の橋の建設だ。従来は橋桁の内側にあった補強材を、外側に配置するというもの。主塔の高さも低くて済むため利用者への圧迫感がなく、コスト削減にも有効だという。「94年に完成した小田原ブルーウェイブリッジが世界初のエクストラードロード橋です。その建設を担当したのが当社でした」と高橋さん。橋の建設地の川幅は、約200メートル。エクストラードロード橋が、効率的に機能する条件だという。  
しかし当初、高橋さんたちはあることに悩まされていた。地元

の技術者の不足だ。「日本では大規模な橋を建設する時、多能工と呼ばれる熟練の職人と、シニアの作業指導者がチームをつくって臨みます。しかし、タイでは専門分野に長けた人材が育っていませんでした」。さらにバンコクは建設ラッシュで、労働者不足が深刻化している。「技術があっても、人がいなければ工事は進まない。いかに工期内で完成させるかが大きな課題でした」と高橋さん。  
今年8月末には約9割が完成。12月5日のタイの国王誕生日の開催を目指して、一致団結して、ラストパートをかけているところだ。アジア最大規模のエクストラードロード橋は、その機能性に加えて、タイ人のデザイナーが意匠を凝らしたオリエンタルな外観も見もの。タイらしい鮮やかなライトアップも計画されている。  
「自分たちが手掛けたものがその土地に残り、現地の人たちに使われてもらえることは大きなやりがいです。特に大型の橋は街のランドマークとして親しんでもらえるので、橋梁屋としてはこれ以上の醍醐味はありません」と高橋さん。タイの人々の希望の象徴となる橋の完成はもうすぐだ。



図面を見ながら橋の設計について議論する高橋さん(右)

### 渋滞解消のカギを握る川

目の前に立ち並ぶ高層ビル。下に目を移すと、見慣れたブランドショップが軒を連ねている。タイの首都バンコク。疑いなく、アジアの代表的な都市の一つだ。  
この10年で、バンコクの街並みは大きく変わった。いわゆる「タイらしい」建物もちらほら見えるが、東京とそんな色ない都会だ。1997年のアジア通貨危機以降、経済の落ち込みからはい上がり、順調に成長を遂げたタイ。日本から手軽に行ける観光地としても人気だ。

しかし急速な発展と引き換えに、さまざまな課題に直面している。中でも目に見えて明らかなのが、慢性的な交通渋滞だ。自動車の所有率は、この10年で約1.5倍に増加。都市鉄道の整備も進められているが、バンコクを含む首都圏は依然として、車依存社会だ。

「今日は家に帰るまで2時間もかかっちゃったよ」  
「でも、ここを通らないと家に帰れないから」  
そんな会話は日常茶飯事。渋滞が起これば、当然、ヒトやモノの流れが滞る。産業の活性化にも影響が及んでしまう。  
その解決のカギを握るのが、街



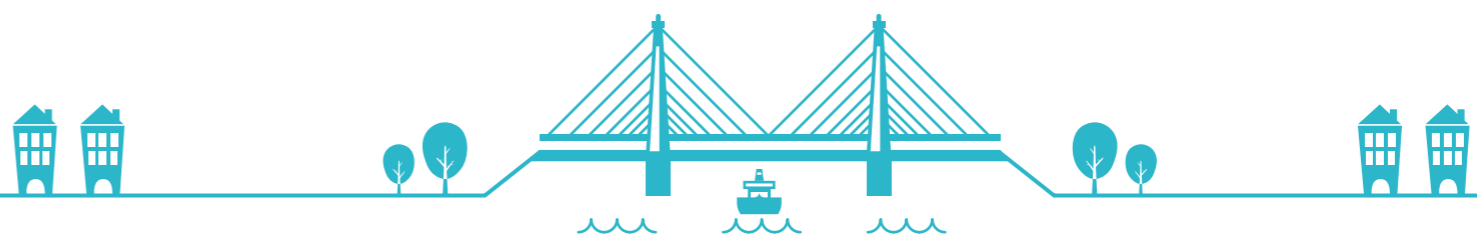
現在、建設が進められているチャオプラヤ川に架かる橋。新しく取り入れられたエクストラードロード橋の建設技術は日本が最先端だ



チャオプラヤ川に架かる橋は、両岸の交通渋滞の緩和に貢献(撮影：久野真一)

## 街と川をつなぐ橋

アジアの成長をけん引してきたタイの首都バンコク。その影響から車の量が増大し、日々の交通渋滞は深刻だ。その解消を目指して、街を縦断する川に架かる橋の建設が進められている。







渋滞に悩まされているジャカルタの中心部、ステイルマン通り。この下を横断して下水道管を設置する工事を進めている

むなど、衛生状態も悪化している。下水道の整備には、当然ながら、地下に下水道管を設置しなければならぬ。街中の地面を掘って工事をするため、周辺の道路を封鎖する必要もある。しかしこれ以上、大渋滞を悪化させるわけにはいかない。そんなジャカルタに、新たな風を吹き込んだ日本企業がある。市内の目抜き通りの地下を横断する下水道管の工事に着手したのが、トンネルを掘る掘進機の老舗メーカー、株式会社イセキ開発工機だ。

1970年代には、日本でも下水道管などを地中に設置するためには、道路を掘り起こすのが一般的だった。その騒音、振動、地盤沈下などを極力なくすために生まれたのが、地面を掘り起こさない推進工法だ。同社はその工法を使い、地上からの遠隔操作で地下を掘り進められる掘進機を40年以上にわたり開発・販売してきた。この掘進機を使えば、掘り起こした土を置くスペースを取る必要もなく、渋滞を起こさずにインフラ整備を進められるのだ。

### インフラ整備のカギは人の力

同社の掘進機は国内外で使われているが、今、特に目を向けている市場がアジアだ。「掘進機はインドネシアでも販売した実績がありました。しかし、その使い方に問題があったのです」。そう話すのは、2013年から現地に駐在する佐々木勝之さん。首都高速道路の延伸工事など、日本国内で30カ所以上の現場を経験してきた技術者だ。「一度に長い距離を掘り進めた方が効率的なのに、インドネシアの技術者たちは100メートルを3回に分けて掘ろうとしていました。掘進機をうまくコントロールできないのが原因で、実は適切に使えば300メートルは一気に掘れるんですよ」。

地下を掘り進めていると、地盤の固さが変化する。地下水を多く含んでいた石が大きく重なり、その場所の条件が違っていると、この道20年の佐々木さんは、「掘進機のカッターの回転方向や圧力、掘り出した土砂の状態や量などをチェックし、状況に合わせて進むスピードを変えるなど、臨機応変に対応することが必要です」と話す。そこで実際にイセキ開発工機の掘進機を使い、インドネシアの技術者と共に工事を進めながら指導している。

その一人、現地の施工会社の技術者、ゼンディ・ミコライさんは、かつて大きな失敗をしたことがある。掘進機が真つすぐ進まず、3メートル以上も横にそれてしまったのだ。「センサーを使って正しい位置を管理する方法を理解し、正確に動かす技術を身に付けた」と意気込む。

佐々木さん(右端)とゼンディさん(手前)。ジャカルタで共に工事に携わる大切な仲間たちだ

### 大都市の成長の陰で

プブーツ、プブーツ。あちこちで飛び交うクラクションの音。朝夕のラッシュに巻き込まれると、普段は車で15分の道のりも1時間以上かかってしまう。そんな大渋滞が今や名物になってしまったの

が、インドネシアの首都ジャカルタだ。高層ビルが立ち並ぶ、アジアの成長をけん引する大都市。仕事を求めて地方から移住してくる人も多く、人口はこの30年間で約2倍の960万人になった。人口増加のスピードがあまりに速く、市民

の生活を支えるインフラの整備が追い付いていない。その一つ、下水道の問題は特に深刻だ。整備されているのは、首都圏全体の2%ほど。それ以外の地域では、生活排水は川に垂れ流し状態だ。雨期には洪水が発生することも多く、下水が街に流れ込

掘り進めるスタート地点に設置された掘進機。「文化の違いを理解しつつ、工事を進める際の安全管理はしっかり教えています」と佐々木さんは話す



掘進機が稼動すると泥水が発生するため、それを処理する機械も同時に操作する。その方法を現地の技術者に指導する佐々木さん(手前)



先端に回転するカッターが付いた掘進機と遠隔操作パネル。地中を進んでトンネルを掘っていく

## 地下から都市を支える

人口が1000万人に迫る勢いのインドネシアの首都ジャカルタ。その急激な成長のスピードに、インフラ整備が追い付いていない。そこである日本企業が、技術者の人材育成に力を入れている。

インドネシア  
from Indonesia



ジャカルタ







奥に見えるのがモンバサ港の既存のターミナルで、手前が建設中の新ターミナル。今後さらに拡張する計画だ（提供：東洋建設株式会社）

約1億5000万人にとって重要な港です」と、モンバサ港を管理するケニア港湾公社（KPA）のフランシス・ギチリ・ンドゥア総裁は話す。

絶え間なく続く、コンテナの積み下ろし作業。ところが、ふと沖に目を移すと、数隻のコンテナ船が並んでいる。港が他の船で埋まっているため、数日間、**渋滞待ち**をしているのだ。

近年、東アフリカ諸国の経済成長により、モンバサ港の貨物取扱量は急増している。現在の貨物取扱能力は年間約90万TEU\*だが、実際に入ってくる量はそれを上回り、まさにパンク状態。このままでは物流がストップしてしまい、経済成長のチャンスをつぶしてしまうことになる。

繰り返す。「クレーンの動きを止めることなくトレーラーが循環して、まったく無駄がない。とても効率的です」と、KPA一般貨物ターミナル責任者のイブリン・ウマズイ・ムワムレさんは感心していた。

こうした地上での作業を支えているのが、ターミナルの司令塔であるオペレーションセンターだ。中には数台のパソコンが並び、画面にはターミナルの全体図が映し出されている。ここでコンテナの動きを管理し、出荷先別に分け、船に積み込む際には重いコンテナが下にくるよう操作している。KPA幹部たちは、食い入るように画面を見つめていた。

続いて、ターミナルに併設されている倉庫へ移動。ターミナルに上がった貨物のうち、雑貨類を一般倉庫に、食品類を冷蔵倉庫に一時保管し、通関や検疫の手続き後、出荷している。一方のモンバサ港では、港から数キロ離れた場所に倉庫があるため、こうもスムーズには出荷できていない。「港の中に倉庫があると、輸送の費用や時間を抑えることができます」と、神戸港の運営に携わる中野宏明さん。KPA幹部たちはその話に耳を傾けながら、モンバサ港の未来の姿を思い描いていた。

新ターミナルが整備され、コンテナの取扱量が増えれば、次なる

※20フィートコンテナを1として、港の貨物取扱量を表す単位。



KPA幹部らがプレゼンした東京でのセミナー。会場はアフリカ進出を狙う日本企業で埋まり、関心の高さがうかがえた

**港の機能強化で  
ビジネスチャンス呼び込む**

しかし、港が拡張されたとしても、スムーズに作業を進めることができないれば、船の渋滞は完全には解消されない。新ターミナルをいかに効率よく運営するか。日本の事例を参考にすべく、7月上旬、KPA幹部4人が来日した。

一行が向かった先は、日本5大港の一つ、神戸港。「大輪田泊」と呼ばれた平安時代から近隣国と貿易を始め、明治時代に入ってから海外との貿易の促進を目指して規模を拡大。世界有数の国際貿易港に発展し、現在のコンテナ取扱量は約250万TEUに上る。

神戸港のターミナルでは、ちょうどコンテナ船の積み下ろし作業が行われていた。クレーンがコンテナを持ち上げ、トレーラーの荷台に載せ、トレーラーが集積場まで運ぶ。降ろしたら、再びクレーンのもとに戻っていく。1船につき約5台のトレーラーがこれを



神戸港のターミナルに併設される倉庫を見学するKPAのンドゥア総裁（左）たち。作業の効率化のため、港で荷物を梱包して出荷している

**沖まで続く  
船の渋滞**

港に接岸する巨大なコンテナ船。岸壁には約50メートルの高さのクレーンがそびえ立ち、コンテナを一つ一つ持ち上げては、下ろしていく。

ケニア東部、インド洋に面したモンバサ港。東アフリカ最大の国際貿易港で、近隣の内陸国ウガンダ、南スーダン、コンゴ民主共和国、ルワンダなどへとつながる重要な玄関口になっている。「東アフリカ諸国は物資や原料を輸入に頼っているため、この地域に暮ら

そこで明治時代からいくつもの国際貿易港を運営してきた経験を持つ日本の協力の下、2007年に一大プロジェクトが動き出した。モンバサ港の拡張工事だ。既存のコンテナターミナルの隣に新ターミナルを建設し、貨物取扱能力を年間約58万TEU増やすというもの。2016年2月の完成を目指し、工事が進められている。

そこで明治時代からいくつもの国際貿易港を運営してきた経験を持つ日本の協力の下、2007年に一大プロジェクトが動き出した。モンバサ港の拡張工事だ。既存のコンテナターミナルの隣に新ターミナルを建設し、貨物取扱能力を年間約58万TEU増やすというもの。2016年2月の完成を目指し、工事が進められている。



神戸港のターミナル。阪神・淡路大震災後も異例のスピードでオペレーションを回復させた



神戸港のオペレーションセンターを視察し、「モンバサ港と同じコンテナ運用のシステムを使っているので参考になりました」と話すKPAのムワムレさん

ケニア  
from Kenya



## 成長を続ける海の玄関口

東アフリカの貿易拠点、ケニアのモンバサ港。  
年々増え続ける貨物量に対応すべく、  
ケニアの行政官たちが港湾運営のノウハウを学びに日本を訪れた。





## 常設型自動漏水監視装置L-sign



水道テクニカルサービス株式会社 (神奈川県)

### 漏水を常時監視!

**開** 発途上国では、24時間いつでも水が出るわけではない。配水管や給水管から水が漏れたり、違法に水が盗まれてしまうなどして、水道局の収入にならない無収水が発生することも。水分野の課題は尽きない。

その解決に自社の技術を生かせると考えたのが、漏水調査を専門とする水道テクニカルサービス株式会社。今、インド南部の産業都市バンガロールで導入を目指している

のが、日本の漏水調査会社と共同で独自に開発した常設型自動漏水監視装置L-signだ。配水管や給水管に取り付けるだけで、漏水の音を自動的に感知してLEDが光って知らせてくれる。

通常、漏水は給水時の音を聞いて調べる。しかし、バンガロールでは週2日、5~8時間しか給水されない地域がほとんど。わざわざそのタイミングに合わせて人を派遣して調査するのは手間がかかる。L-signは給水時間に合わせて起動するようにカスタマイズでき、5年間は監視を続けることができ効率的だ。

「L-signで漏水の当たりをつけ、最終的に場所を特定して修理するのは人。現状では配水管の敷設や修理の高い技術を持った人材が少ないため、そういった技術も一緒に伝えたい」と大島健司社長は意気込んでいる。



漏水の音を聞き分ける技術を学ぶバンガロール市水道局の職員たち。これまで漏水調査は行われていないため、技術習得の意欲は高い

日東建設株式会社 (北海道)

### インフラの強度を点検!

**ア** フリカの経済大国ナイジェリアでは鉄道網の整備が進んでいないため、モノの輸送の9割をそれ以外の陸上輸送に頼っている。しかし道路や橋などの定期的な維持管理はもちろん、新設時に強度などの品質チェックがされていないのが課題。老朽化したり強度が十分でなければ、いつか大事故が起こりかねない。

そこで、コンクリート製建造物の調査技術に強みを持つ

日東建設株式会社が開発し、ナイジェリアで普及を目指すのがコンクリートテスターだ。ハンマー部分に加速度計が内蔵され、たたきだけで強度を点検できる。床・天井・壁など、どんな角度でも使え、測定精度が高いデータがテスター内に記録される。その機能性に現地の技術者からは驚きの声が上がった。

今後、さらに運輸交通インフラの整備が進むと考えられるナイジェリア。同国の公共事業省や建設コンサルティング企業、施工業者、ゼネコンなど、販路開拓のポテンシャルは高い。技術開発部の久保元樹さんは、「これまで海外展開先として考えていたのは先進国ばかり。でも、ナイジェリアを訪れたことで、開発途上国での需要の大きさを肌で感じる事ができました。自分たちの技術を世界に広めていきたい」と力強く話している。

## コンクリートテスター



特集 インフラ整備  
世界に発信! 日本の技術力

世界が注目!

# Made

# in JAPAN

近年、目覚ましい発展を遂げるアジアやアフリカの国々。そんな開発

途上国の成長を後押しすべく日本が発信する技術を紹介!

## スケールチェッカー



中外テクノス株式会社 (広島県)

### 配管内の汚れを診断!

**約** 60年にわたり、測定・分析機器を専門に扱ってきた中外テクノス株式会社。その経験を生かして、新たな市場として目を付けたのがインドネシアだ。

経済成長に伴い国内のエネルギー消費量が急増し、また輸出品としても重要な石油。製油所や石油化学工場の増設が見込まれる中、設備の維持管理体制が十分ではなく、壊れるまでそのまま...ということも少なくない。

そこで活躍するのが、同社が開発したスケールチェッカーだ。石油や水などが通る配管の外側から微弱で安全な放射線を当てると、内側に付着した異物をセンサーが感知し、専用のソフトウェアで分かりやすく画像化してくれる。「工場内には人間の血管のように、いくつもの配管が複雑に張り巡らされています。1カ所でも配管が詰まると工場が動かなくなり、一大事につながります」と、構造物エンジニアリング事業部本部長の石高星太郎さんは話す。配管の中にカメラを入れる検査法では工場の操業を止めなければならないが、スケールチェッカーならその必要はない。

現地の検査会社などに紹介すると、「今までにない検査方法」と多くの関心を得た。日々の点検で不具合を見付け、壊れる前に直すという日本ならではの予防の意識も伝えていく。



インドネシアの検査会社などに技術を紹介。日本国内の石油化学工場などでのシェアは7割を超える



「シニア海外ボランティア」

# 森田 章一

MORITA Shoichi

## プラスチック加工のスペシャリスト

高さ5メートルはある機械を巧みに操り、プラスチック原料からフィルムを作り出していく若者たち。コロンビア南西部、サンティアゴ・デ・カリの職業訓練校では実習が行われていた。指導に当たるのは、シニア海外ボランティアの森田章一さんだ。

大学卒業後、得意科目の化学で自動車開発に携わりたいと、自動車メーカーに就職した森田さん。約20年

# JICA Volunteer Story

### PROFILE

1951年愛知県出身。大学卒業後、日産自動車株式会社、富士ゼロックス株式会社に勤務。定年退職後、2012年9月からシニア海外ボランティア(プラスチック加工技術)としてコロンビアで活動中。

# 「技術者の技と心を磨いてほしい」

大学の学費が払えず、無償の職業訓練校で学ぶコロンビアの若者たち。彼らが就職に必要な知識と技術を身に付けられるよう、シニア海外ボランティアの森田章一さんは、プラスチックの加工技術を伝えている。



「状態をよく見て、慎重に操作してください」。チューブを伸ばす作業を指導する森田さん

にわたり、プラスチックやゴムの部品の開発を手掛け、電気機器メーカーに転職した後も付加価値の高い部品の開発に力を注いだ。海外での仕事も多く、ベルギーには3年半滞在。現地での業務を経て、もつとその土地に根差し、現地の人のためになる仕事がしたいと思うようになった。

そんな中、会社の元同僚から、定年退職後にシニア海外ボランティアに参加したという話を聞く。「自分の経験を生かして国際貢献できてやりがいがあった」。その言葉に心を突き動かされた森田さんは、インターネット上で募集要項を見てみることに。いくつもの職種がある中、「プラスチック加工技術」に目が留まった。自分以外にこの職種の適任者はいないのではないかと。森田さんは心を決めた。

## 技術者の心構えを伝える

コロンビアには、政府が運営する職業訓練校が全国各地にある。高校卒業後、大学の学費が払えない若者たちのために、1、2年間、無償で教育を提供しているのだ。工業科、商業科、調理科、看護科など、卒業後の就職に直結するコースが用意され、約100万人が学んでいる。

森田さんが配属されたのは、樹脂加工や金属加工を学ぶサンティアゴ・デ・カリ市内の学校。担当は、フィルムやチューブの製造など、プラスチックの加工技術の指導だ。「学業不振や経済的理由で卒業できない生徒が約4割いると知り、全員が技術を身に付け、就職できるように後押ししたいと思いました」。同僚のオマール・オサール先生と共に、約25人のクラスを4つ受け持つことになった。

何回か授業をこなすうちに、生徒たちの課題を見付



a.フィルムを作る際に必要な材料の重量を計算する方法を指導。しっかり理解できているか、常に生徒の顔を見回している  
b.機械の上部でフィルムが作られ、巻き取られていく。生徒たちはフィルム幅が規定通りか巻尺で測定する  
c.森田さんが活動する職業訓練校。バスの運賃を払えず歩いて通学する生徒もいる  
d.コロンビアで障害者の自立を後押しする青年海外協力隊員の依頼を受け、森田さんは障害者が使いやすいスプーンを試作した

けた。問題の答えさえ分かればいい、という考え方が強かったのだ。なぜその答えになるのかというプロセスを重視しなければ、深く理解できず、応用もできない。

そこで、目を付けたのが実習の時間だ。「私がそうであったように、実際に手を動かして、失敗し、悩み、解決策を導き出した経験は、必ず次につながります」と森田さん。座学に比べ、実習の時間が少なかつたため、オサール先生の賛同も得て、少しずつ増やしている。

その時間を使って、森田さんは日本の製造業の作業効率や安全性の高さを支える考え方である5S※も伝えている。ある日、プラスチックを加工する機械の使い方を学ぶ実習のこと、機械の周りがプラスチックのカスで汚れていたのに、一部の生徒がそのままにして帰ってしまった。翌日、森田さんは「後片付けをきちんとしないと、次に使う人が迷惑するでしょう。思わぬけがにもつながります」と一喝。生徒たちは神妙な面持ちで聞き入っていた。

「5Sの中の、しつけ」は、こういった実体験を通して伝えることが重要だ。技術だけでなく、技術者としての精神も身に付けてほしい。森田さんの根気強い指導に生徒たちの態度が少しずつ変わり、作業場を自分で整理整頓するようになった。

そんな森田さんには、オサール先生も熱い信頼を寄せる。「モリタさんは、プラスチック加工の最新の知識を豊富に持っています。生徒たちには、日本の熟練の技術者から最大限のことを学んで技術を磨いてほしい」と期待する。

「残りの活動期間、少しでも生徒の実技能力が向上するように指導したい」と森田さん。日本の技術者の熱い指導に、コロンビアの若者たちはきつと応えてくれるだろう。





齋藤さんから離乳食の作り方を学んだ母親が、近所の女性たちにデモンストレーションし、知識を広めていく

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## 研修員がつないだ縁で マラウイへ

「2日30品目を食べましょう」  
日本人なら、そんなキャッチフレーズを聞いたことがあるはず。健康を保つためには、さまざまな食材をバラ

スよく食べる必要がある。日本では常識だが、アフリカの南東部、マラウイの食生活は真逆だ。

朝食はトウモロコシの粉で作ったおかゆと紅茶。そもそも朝食を食べていない人もいる。昼と夜はトウモロコシの粉をお湯で練ったシマに、ゆでたホ



新しく支援を始める村を訪れ、どんな活動をするか説明する齋藤さん(右から3人目)と現地スタッフ



家族構成や健康状態などをマラウイ看護大学の教員が聞き取り調査。活動のベースとなる貴重なデータだ

ウレンソウなど野菜の付け合わせを少し。この食事がほぼ毎日続く。これでは栄養が偏り、身長が伸びなかったり体重が増えなかったりと、子どもの成長に良くない。

その現状を改善しようと立ち上がったのが、NPO法人ISAPH。福岡県久留米市にある聖マリア病院を母体と

するNGOだ。30年以上にわたり、保健医療分野でJICAの研修員を受け入れる中で、「現地の人々にもっと寄り添って力になりたい」という思いからラオスで乳幼児の栄養改善に取り組み始め、現在はマラウイにも活動の場を広げている。

その縁をつないだのは、2000年

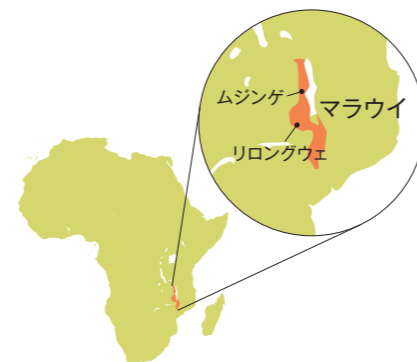
# アイサップ NPO法人 ISAPH

## 栄養改善で子どもたちの 健やかな成長を

栄養バランスの良い食事を取れず、健康に暮らせない人が多い開発途上国。  
NPO法人ISAPHはマラウイの人々を巻き込みながら、  
未来を担う子どもたちの栄養改善に向けて奮闘中だ。



毎月子どもたちの身長と体重を測るヘルスセンターの職員。村のボランティアに正確な計測方法を指導する



た」と齋藤さんは苦労を話す。

調査の結果、さまざまな課題が浮き彫りになった。日中は乳幼児を連れて畑で働く母親が多いが、母乳を与える回数が少ない。消化機能が発達していない生後6カ月未満の乳児に、水やおかゆ、シマや野菜まで与えてしまっていることも分かった。

さらに、離乳食のおかゆもデンプン質に栄養が偏っている。そこで地域ごとに母親グループを立ち上げ、野菜や卵などを加えた栄養たっぷりの離乳食の作り方を伝えることに。少しの工夫で、子どもの健康を守ることができるという好評だ。

しかし母親だけに知識を伝えても、男性優位の文化を変えるのは難しい。家庭で日々実践してもらうには、まだまだこれからだ。「携帯電話のように、いくら高価なものでも、本当に必要だったら驚くほどの勢いで普及します。子どもに食べさせたい！」と思っても、伝えるレシピを広められれば、必ず栄養改善につながるはずだ。プロジェクトマネジャーを務める浦部大策「ISAPH理事はそう意気込む。コミュニティの共用菜園でのニンニクや大豆といった栄養価が高い換金作物の栽培、シマにかけるだけで栄養が取れるふりかけの導入などを検討中だ。」

まだまだやるべきことはある。マラウイの子どもたちが大きく成長できるように、ISAPHの挑戦はこれからも続く。



シマのおかゆを食べる子ども。成長に欠かせない栄養素を離乳食に加えることで抵抗力を上げ、病気を予防する

## 現地の人たちが自身が 立ち上がるための後押し

首都リロングウェから北に400キロ。ムジンゲ村も含め、1万5000人ほどが暮らす26村がISAPHの活動場所だ。「子どもの出生数も死亡数も把握されていなかったので、まず聞き取り調査を始めました。隣の家まで数キロなんてことも多くて大変でし

る前に命を落としてしまう子は多い。「直接の死因はマラリアや下痢症などの感染症ですが、栄養不良で抵抗力が落ち、感染症にかかりやすくなっています。栄養と健康が結び付いていると知っている人が少ないのです」と齋藤さん。きちんと栄養が取れば、救われる命がある。JICA草の根技術協力事業を通じて、2013年から住民への健康教育を開始した。





スリランカでは、現地の子どもたちと折り紙や歌などで交流。中学3年の橋本彩良さんは「国際協力にずっと興味があったので貴重な経験でした」



マレーシアのスタディーツアーでは、コタキナバルで環境保護の取り組みなども視察。「おなかを壊したりもしたけど、それも含めていい思い出です」と生徒たち

「グローバルスタディーズ」も、そんな中安先生の発案で始まった科目だ。「自分で情報を取捨選択しながら知識を深めて、視野を広げてほしい」。英語とICTを組み合わせて、国際協力を学ぶという新しいスタイル。現場で活躍する人を招き、講演をしてもらうこともある。

山梨英和での学びを通じて、生徒たちは確実に変わり始めている。「英語を勉強して、もっと世界のことを学べるようになりたい」。その目を輝かせながら話してくれた。未来を担う頼もしい女性たちが山梨英和で育ち、社会に羽ばたいていく。

## 世界とつながる教室

# グローバルな視点で羽ばたく

古くから英語教育に力を入れてきた山梨英和中学校・高等学校。今年度新設された「グローバルスタディーズ」の授業には、生徒たちが「世界とつながる」ための工夫が散りばめられている。



iPadを使ってMDGsについて調べる生徒たちと吉野先生。自分自身で調べることで、理解が深まる

## 丘の上にたたずむ歴史ある学校

7月の3連休の初日、東京からの特急電車は、大きな旅行かばんを抱えた観光客でにぎわっていた。そんな中、向かった先は山梨県甲府市。甲府駅で下車し、前方にたたずむ愛宕山に向かって5分ほど歩いた小高い丘に、山梨英和中学校・高等学校は立っている。

その名前に聞き覚えのある人もいるかもしれない。そう、この学校は、NHKの朝の連続テレビ小説『花子とアン』の主人公、村岡花子がかつて教べんを執った学校。1889年に山梨英和女学校として産声を上げ、キリスト教の教えに基づいた女子教育を推進。村岡花子の生涯からも分かるように、英語教育にも積極的な学校だ。

「おはようございます！」  
校内に入ると、生徒たちが元気よくあいさつしてくれた。これから1時間目の授業が始まるころ。高校1年生の教室には、約20人が机を並べてチャイムが鳴るのを待っていた。少人数教



グローバルスタディーズの英語を担当する糟谷先生とミュレル先生。「生徒たちには国境にとらわれずに世界に羽ばたいてほしい」



大きなスクリーンに映し出されるアフリカの地図。視聴覚教材を多用することによって、生徒たちも理解しやすくなる



あつという間に、この日の授業も終盤。吉野先生は、自身がマラウイで撮影してきた写真をスライドに映した。HIV/エイズなどの感染症で命を落としてしまう人がいること、女性たちは仕事を求めるのが難しいこと、貧しくて学校に通えない子どもたちがたくさんいること……。現地の人たちの明るい笑顔に影を落としている問題を、自分ごととして考えてほしい。吉野先生が現地で出会った人たちのストーリーを、生徒たちはじっと聞いていた。

教室での学びだけではない。山梨英和では、カナダやオーストラリアでの語学研修に加え、マレーシアやスリランカでJICAボランティアやNGOなどの活動を視察するスタディーツアーに参加するチャンスもある。「テレビで見ていた貧困や環境の問題が、マレーシアに行っただけで一気に身近になりました。私にもできる国際協力を探していきたい」と高校1年の望月海帆さん。慣れない気候や食べ物、ひたすら続くこぼこの道路など、日本では経験のないことばかり。さまざまな方向から「世界」に触れてほしい。それが先生たちの願いだ。

吉野華恵先生だ。「それでは次に、MDGsの中で達成が近い目標、遅れている目標について調べてみましょう」。今年の3月まで現職参加制度を使って、青年海外協力隊としてマラウイで活動していた吉野先生。「世界のことを子どもたちによりリアルに伝えたいと思い、協力隊に参加しました」と話す。自身の経験を交えながら、途上国の現状や日本の国際協力について伝える。それが彼女の役割だ。

## 総合的にグローバル人材を育てる

MDGsの達成状況を調べるために、

育もこの学校の売りの一つだ。「今日はミレニアム開発目標『Millennium Development Goals』について勉強します」。英語科の糟谷理恵子先生の声に耳を傾ける生徒たち。土曜の1、2時間目は「グローバルスタディーズ」。今年度から始まった、開発途上国の課題や国際協力について学ぶ科目だ。「MDGsは持続可能な開発『sustainable development』を指すものです」。MDGsの8つの目標について、糟谷先生とカナダ出身のクレイグ・ミュレル先生が英語で説明し、生徒たちが復唱する。

続いて教壇に立ったのは、社会科の



### ヒトとモノの移動を活性化する インフラを整備したい

港や道路、鉄道などのインフラ整備に取り組みJICA社会基盤・平和構築部。小柳桂泉さんは、民間企業で長年インフラ整備を手掛けてきた経験を生かし、アフリカの港の整備に奔走している。

#### 世界に誇る 日本のインフラ整備の技術

高校生の時、瀬戸大橋と青函トンネルという巨大インフラが完成し、地図に残る仕事に憧れるようになりました。大学では土木工学を専攻し、また、バックパッカーとして海外を旅していました。訪問国の一つのエジプトでは、日本企業が改修したスエズ運河を見学。日本が世界に誇る工事を目の当たりにして、海外のインフラ整備に興味を持ちました。

卒業後はゼネコンに就職し、日本国内の港湾工事の現場管理や設計などの業務に携わりました。残念ながら海外での仕事を担当する機会はなく、やはり挑戦してみたいという気持ちが強くなり、5年目にJICAに転職しました。

#### 平和を呼び込む 橋を建設

JICAに入ってから3年目には、念願の海外のインフラ整備を手掛けることに。内戦が続くスリランカへ出張しました。北西部に浮かぶマナー島と本島を結ぶ橋の視察に向かったのですが、そこで待っていたのは衝撃的な光景でした。橋は内戦で爆破され、仮設の橋がかかるうじて架かっている状態。バスが通ればぐらつき、いつ崩落してもおかしくない。マナー島の住民にとっては、

本島にある学校や病院、市場などへと通じる唯一の橋だけに、早急に対応が必要だと思いました。

視察の5カ月後には、新たな橋の建設に向けた本格調査を進めるため、コンサルタントと共にあらためて現地入りしました。しかし前回とは街の空気が一変していました。道路脇には銃を持った兵士が並び、上空には戦闘機が飛んでいました。内戦が激化していたのです。

ひとまず、調査団を引き上げることにしましたが、それでも何とか事業を始められないか模索しました。現地のJICA職員と密に連絡を取りながら治安状況を確認。1カ月後、情勢が落ち着いていたタイミングを見計らい、警備を強化して再度調査団を派遣しました。

半年の調査を経て建設が始まり、2010年について橋が完成しました。その前年に内戦が終結したため、橋は平和の象徴とされ、国を支えるインフラ整備に協力できたことにやりがいを感じました。

#### 将来を見据えた 開発計画

現在は、主にアフリカの港湾整備を担当しています。その一つが、東アフリカ最大の国際貿易港であるケニア東部のモンバサ港。近年、貨物の取扱量が急増し、日本の協力で新コンテナターミナルの建設が進

んでいますが、今後も需要は増え続ける見込みです。どうターミナルを拡張し、将来の需要増に対応していくのか。ケニア政府は09年に開発計画を作成していますが、精度が不十分だったため「新しい開発計画を立てましょう」と打診しました。

しかし、ケニア側は「必要ない」と協議は決裂。一時はあきらめかけましたが、モンバサ港が今後きちんと機能していくためには必ず必要なものだと確信していたので、「将来の需要予測を精緻に行い、それを基に開発を進めた方が効果的」と粘り強く交渉。半年後、ようやくケニア側が納得してくれ、今、新たな開発計画作りが始まったところです。

港や道路、橋などが整備されれば、ヒトやモノの移動が活発になります。開発途上国の人々の生活を改善し、経済が活性化するようにインフラ整備に取り組んでいきたいと思えます。



パキスタンでは道路舗装技術の研究施設の建設予定地を視察した



JICA社会基盤・平和構築部  
運輸交通・情報通信グループ  
兼 計画・調整課

小柳 桂泉  
KOYANAGI Yoshimoto

大学卒業後、ゼネコンに就職。退職後、2001年にJICAに就職。JICA沖縄、無償資金協力部(当時)、パキスタン事務所、JICA東京を経て、2013年4月から現職。



ケニアのモンバサ港で進む新ターミナルの建設現場を視察する小柳さん(左から2人目)



『人間開発報告書』2014年版の発表会を日本で開催

01



安倍総理に『人間開発報告書2014』を手渡すクラークUNDP総裁(右から2人目)。マリクUNDP人間開発報告書室長(右端)、田中JICA理事長(左端)



日本が防災分野で支援しているペルーの国家緊急オペレーションセンター

開発協力に関心がある人にはおなじみの『人間開発報告書』。世界で人間中心の開発を普及・推進するため、国連開発計画(UNDP)が1990年以降、毎年発行しているものです。先進国を含む各国の開発の度合いを測定する「人間開発指数」を発表し、その時々の国際潮流に沿ったテーマを分析しています。

2014年版のテーマは、「人々が進歩し続けるために…脆弱を脱し強靱な社会をつくる」。日本は度重なる自然災害を乗り越え、国際社会で防災分野の協力をけん引していることから、この国際公式発表会のホスト国を18年ぶりに務めることになりました。7月24日、会場となった国連大学本部ビル(東京・渋谷)には350人以上の参加者が集まりました。

最初に登壇した安倍晋三内閣総理大臣は、社会の強靱性の柱となる防災分野について、国際社会やUNDPと連携しながら日本の知見や技術を最大限活用して貢献していくことを表明しました。続いてヘレン・クラークUNDP総裁は、「防災と人間の安全保障に関して、世界的なリーダーとして認知されている日本で発表会を開催できることをうれしく思う」と述べ、来年3月に宮城県仙台市で開催される第3回国連防災世界会議についても言及しました。

同報告書作成に助言を行うアドバイザリー・パネルに参加している田中明彦JICA理事長は、「開発途上国の現場に身を置く中で、持続的な発展のために脆弱性や強靱性と向き合うことは不可欠と感じている」と述べました。その上で、ミレニアム開発目標(MDGs)が終了する2015年以降の開発目標では、社会的に脆弱な状況にある人々に対する配慮や、紛争や自然災害などのリスクに備える視点が必要と指摘しました。JICAはこれからも途上国の強靱な社会づくりに貢献していきます。

国連人道問題調整事務所と連携強化

02



署名を終えて握手を交わすエイモス人道問題担当国連事務次長(左)と田中JICA理事長

イラク、パレスチナ自治区、シリア、南スーダンなどでは、近年、長期化する内戦や紛争、頻発する大規模自然災害により、人道支援の必要性が強まっています。そこで7月23日、JICAと国連人道問題調整事務所(OCHA)は、新たなパートナーシップに向けて業務協力協定を締結。田中明彦JICA理事長と、訪日中のヴァレリー・エイモス人道問題担当国連事務次長兼緊急援助調整官が署名を行いました。

両機関は、特に開発途上国の災害対応能力の向上に向け、災害対応を担う政府機関への支援、緊急援助への貢献、援助調整への積極的な参加などを共に支援していきます。田中JICA理事長は、「この連携により、人道支援と開発援助のつながりが強化され、切れ目のないより効果的な支援が実現できると信じています」と述べました。

「世界の笑顔のために」プログラム物品募集中

03



ガーナの子どもたちに届けられた鍵盤ハーモニカ

もう使わなくなってしまったけれど、まだ使えるような物が家に残っている方はいませんか。

教育、福祉、スポーツ、文化など分野で、開発途上国が必要とされている物品を日本で募集し、JICAボランティアを通じて各国に届ける「世界の笑顔のために」プログラム。個人でももちろん、学校、企業、地域など、さまざまな形で参加できます。

なわとびや書道用具など、あなたの身近にある物が国際協力の一歩になります。たくさんのご応募をお待ちしています。

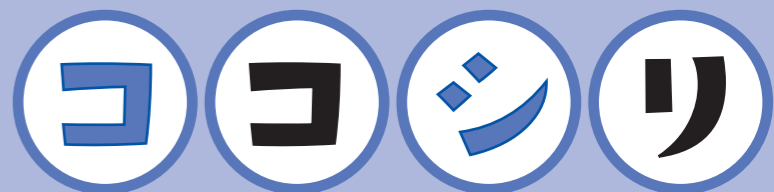
【参加申込書受付期間】10月1日(水)～11月14日(金)

【問い合わせ先】青年海外協力隊事務局「世界の笑顔のために」プログラム係

【TEL】03-5266-9196

【URL】www.jica.go.jp/partner/smile/





「ここが知りたい」。国際協力に関係する  
 いろんなトピックを分かりやすく解説します!



日・カリコム首脳会合で一堂に会した各国の首脳たち  
 (写真提供: 内閣広報室)

ODA政策

## 「安倍総理、中南米歴訪」 中南米との絆を 深める

7月25日～8月4日、安倍晋三内閣総理大臣は  
 中南米地域を歴訪し、各国首脳と会談しま  
 した。

**多** くの日系人が暮らす中南米地  
 域は、日系企業の主要な進出  
 先の一つ。安倍晋三内閣総理大臣は  
 今回の歴訪を通じて、各国との関係  
 強化を図りました。

トリニダード・トバゴの訪問は、  
 日本の総理大臣として初めて。カリ  
 ブ共同体(カリコム) 14カ国の首脳  
 などと「日・カリコム首脳会合」を  
 行い、小島しよ国特有の脆弱性を克  
 服するため、日本の技術や知見を生  
 かし、防災、環境、エネルギー、廃

棄物処理、水産などの分野で協力し  
 ていくと表明しました。また、国連  
 開発計画(UNDP)との連携の下、  
 カリブ8カ国を対象とした15億26  
 00万円の環境・気候変動対策無償  
 資金協力を実施することで合意しま  
 した。

その他にも、メキシコ、コロンビ  
 ア、チリに加えて、2014FIFA  
 Aワールドカップが開催されたブラ  
 ジルを訪問。ルセーフ大統領との会  
 談では、造船、インフラ整備、石油・  
 ガス開発、医療などの分野における  
 両国の経済関係の強化について意見  
 交換しました。

さらに今回の訪問には、日本の経  
 済界や政府機関、学術関係機関のト  
 ップ約70人が同行。成長著しい新

興国ブラジルへの事業展開に高い関  
 心を示され、日本からの投資の増加  
 にルセーフ大統領からも期待が述べ  
 られました。両国のビジネス関係者  
 が集まったセミナーでは、安倍総理  
 がかつて「不毛の大地」と呼ばれた  
 セラードが、日本の協力により一  
 大穀倉地帯に変わろうを遂げた例に触れ  
 るとともに、今後は人的交流をさら  
 に拡大していきたいと述べました。

また、夏季オリンピックが201  
 6年にブラジルのリオデジャネイロ  
 で、その4年後の2020年に東京  
 で開催されることに触れ、日本政府  
 のスポーツを通じた国際貢献策「S  
 port for Tomorrow」プログラムを  
 中南米で展開していくことを表明  
 しました。

### 安倍総理の訪問国



#### メキシコ

首都: メキシコ・シティ  
 面積: 196万km<sup>2</sup> (日本の約5倍)  
 人口: 1億2,230万人 (2013年)  
 言語: スペイン語  
 主要産業: 製造業、鉱業、運輸・通信業  
 1人当たり国民総所得 (GNI): 9,940ドル (2013年)



#### チリ

首都: サンティアゴ  
 面積: 75万6,000km<sup>2</sup> (日本の約2倍)  
 人口: 1,762万人 (2013年)  
 言語: スペイン語  
 主要産業: 鉱業、農林水産業、製造業  
 1人当たり国民総所得 (GNI): 1万5,230ドル (2013年)



#### トリニダード・トバゴ

首都: ポート・オブ・スペイン  
 面積: 5,128km<sup>2</sup> (千葉県よりやや大きい)  
 人口: 134.1万人 (2013年)  
 言語: 英語、ヒンディー語、フランス語、スペイン語  
 主要産業: エネルギー、鉄鋼製品、食品、セメント  
 1人当たり国民総所得 (GNI): 1万5,760ドル (2013年)



#### ブラジル

首都: ブラジリア  
 面積: 851.2万km<sup>2</sup> (日本の約22.5倍)  
 人口: 2億40万人 (2013年)  
 言語: ポルトガル語  
 主要産業: 製造業、鉱業、農牧業  
 1人当たり国民総所得 (GNI): 1万1,690ドル (2013年)



#### コロンビア

首都: ボゴタ  
 面積: 113.9万km<sup>2</sup> (日本の約3倍)  
 人口: 4,832万人 (2013年)  
 言語: スペイン語  
 主要産業: 農業、鉱業  
 1人当たり国民総所得 (GNI): 7,560ドル (2013年)



キルギスのオリガ・ラヴロヴァ財務大臣と無償資金協力の交換公文に署名



ウクライナの国内避難民支援のための緊急無償資金協力にかかる引き渡し式

**7** 月15～18日、岸田文雄外務大  
 臣はキルギスとウクライナを  
 訪問しました。今年は、中央アジア  
 諸国と日本が共に地域の安定と発展  
 を図ることを目的とした「中央アジ  
 ア+日本」対話を開始して10周年の  
 記念の年。キルギスで開かれたこの  
 対話枠組みでの外相会合では、この  
 10年を総括するとともに、次の10年  
 の展望について意見交換しました。

岸田外務大臣は、農業、防災、麻薬  
 対策、国境管理などの分野において  
 協力を強化していく旨を表明し、ま  
 た、キルギスとの間で、新たに道路  
 維持管理のための機材整備と人材育  
 成の2件の協力を合意しました。

ODA政策

## 「岸田外務大臣、キルギスとウクライナを訪問」 さらに協力強化を目指す

続いて、緊迫した情勢への懸念が  
 高まっているウクライナを訪問。ポ  
 ロシェンコ大統領の表敬では、国の  
 安定を確保し、民主化・経済改革を  
 推進するための取り組みを積極的  
 に支援したいと述べ、ポロシェンコ  
 大統領も日本との関係強化に期待を  
 示しました。また、ウクライナの国内  
 避難民などに対する緊急無償資金協  
 力の引き渡し式にも出席しました。

また、クリムキン外相との会談で  
 は、ウクライナの経済状況の改善に  
 向け、今回書簡の交換が行われた「経  
 済改革開発政策借款」も含めて、最  
 大約1500億円の支援を着実に実  
 施していくとしました。

## Message from Kiribati

### 生まれ変わった海の生命線の港



ペシオ島とバイリキ島を結ぶ道「ニッポンコースウェイ」は日本の  
 協力の象徴



拡張前後の  
 ペシオ港

**在** フィジー日本国大使館は大洋  
 州の複数の国を管轄していま  
 すが、その1つであるキリバスは太  
 平洋のど真ん中に位置し、赤道をま  
 たぐよりに東西南北に点在する33の  
 環礁からなる国です。

人口は約10万人。かつて輸出して  
 いたリン鉱石は枯渇し、現在、政府の  
 収入源は日本などからの漁業権益  
 が大半を占めています。豊かな漁  
 場には、日本の漁船も多数訪れてい  
 ます。

キリバスのような島しょ国で必要  
 不可欠なのが、人の往来の玄関であ  
 り生活に必要な物資を調達するため  
 の港。これに対して日本は、海洋国家  
 としての経験を生かした支援を行  
 っています。

国内唯一の国際港であるペシオ港  
 は、近年の輸送コスト削減を目的と  
 した船舶の大型化に対応していな  
 かったため、コンテナ船を沖合に停  
 船させ、海上で作業用の船への積み  
 替え作業を行っていました。これによ  
 り作業効率が落ちるだけでなく、安  
 全面でも問題となっていました。

そのため、日本の協力により大型  
 船でも直接着岸できるよう、沖側へ  
 連絡橋および係留橋を増設し、作  
 業の効率化と輸送コストの低減を  
 図りました。結果、コンテナの陸揚げ  
 に3、4日要していたのが、2日に  
 なり、物流コストの削減にもつな  
 がっています。

在フィジー日本国大使館

國場幸恒 二等書記官

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン(www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/)でご覧いただけます。



## 人情のブラジル

フォトジャーナリスト  
渋谷 敦志

空から一望したリオデジャネイロの街並み



LFCで教育を受ける子どもたち



CRIARTに通うヴィヴィアーニさんと2人の息子

18年前、大学を休学して1年間、サンパウロにある法律事務所での研修を受けたことがある。それ以来、ブラキチ（ブラジル大好き人間）を自認して、写真を撮りながらブラジルを旅している。

その僕にこの原稿の依頼があったのは、2014 FIFAワールドカップが始まる前。ブラジルの決勝戦を見てから書こうと油断していたら、サッカー王国ブラジルは準決勝のドイツ戦で史上最悪のスコアで大敗してしまい、しばらく放心状態だった。僕でさえ相当ショックを受けたのだから、ブラジル人には話題にもしたくないような悪夢なのだろう。しかし、今年2月にリオデジャネイロを訪問した際、現地はさぞ高揚しているのかと思いきや、しらけている人が多かったのが意外だった。今回のワールドカップへの巨額な税金の浪費、サッカー界の行き過ぎた商業化、拡大する格差社会への不満、不十分な医療や福祉のサービス…。街中で聞いたこれらの声は、後に各地で頻発した抗議デモの主張と重なっている。

同じような問題は、僕が住んでいたころからあった。しかしブラジルは今、国内総生産（GDP）で世界第7位まで経済が発展した。

なかなか難しく、ずっとボウサの中にいる」と、LFCのマガリャンス校長は指摘する。

大麻やコカインなどドラッグのまん延も、社会に深刻な影を落としている。貧困地域には娯楽が少ない。若者らは週末に、アメリカンパーティーを家で開き、食べ物を持ち寄り「ドラッグ」をする。そんな18歳以下の少年を麻薬を売買する組織は取り込んでいく。子どもは刑務所に送られないからだ。ブラジルだからといって、みんながサッカーをしているわけではないのだ。

少年だけではない。「かわいらしい人形で遊んでいた11歳の少女が、翌日まるで大人の女性のようにセックスの話をしている。子どもの世界にセックスとドラッグが入り込んでいる」とマガリャンス校長は視線を落とした。

もう一つは、リオデジャネイロ市内にあるCRIARTという、主に自閉症や発達障害を持つ人たちとその家族をサポートしているNGOだ。行政の財政支援はずっと滞っていて運営は容易でないようだが、この地域では障害者支援の活動をする団体が少ないため、不可欠な存在となっている。

自閉症の息子2人を育ててきたヴィヴィアーニさんにとって、CRIARTは第2の家族だという。

「木の柵で囲まれた道を牛が歩く。その道は牛しか通れない。この社会は柵なのよ。そこを通る以外の選択肢を与えてくれない」。

ワールドカップ、そして2年後のリオデジャネイロでの夏季オリンピックを控えて世界の耳目を集めるようになり、社会的な矛盾をカモフラージュできなくなってきたのは間違いない。

今年訪問した2つのNGOの活動から、不満や抗議の声の向こうにある現実を垣間見たいと思う。

リオデジャネイロ北部、ドゥケ・デ・カシアスにあるLat. Fabiano de Cristo (LFC)は1958年、社会から見捨てられていた貧困地区の子どもたちを救済しようと設立されたNGOだ。貧しい家庭の子どもを預かる託児所のような活動から始まり、今では全国65カ所の施設を持つほどになった。それだけニーズが増えているということだろう。

LFCに来る子どもの親の多くがシングルマザーだ。性的な暴力を受けたり、夫が犯罪に手を染めたりして、子どもを安心して育てる環境を失っている。ほとんどが貧困層向けの公的給付金「ボウサ・ファミリア」を受けているが、「効果は一時的で、逆に援助依存の入り口になっている。出口は仕事を見つけて社会的に自立することだが、学歴なしでは

しかしCRIARTはどんな障害者も受け入れ、子どもの好奇心を育む教育を与えてくれる。ヴィヴィアーニさんは、社会での本当のチャレンジは障害者を育てることではなく、柵である社会を変えることなのだという。「私がプレッシャーを感じるのは、朝起きた時、体の大きい2人の息子を起すことだけ。CRIARTは毎日発見があるから前に進むことができるの」。ヴィヴィアーニさんの持ち前の明るさに、他の母親たちは勇気付けられている。

滞在の終わりに、リオデジャネイロに住むブラジル人の親友と再会した。「金、金、金だよ、今のブラジルは。金で装飾が立派になっただけだ」。彼のブラジル社会への見方は前よりも手厳しかった。

ワールドカップを通じて見えるブラジルは、まさに装飾で彩られたイメージだ。それを否定するわけではないが、僕がブラキチになった理由はそこじゃない。ブラジルの魅力は何とんでもない。友人や家族を何よりも大事にする人情や、どんな人種も差別なく受け入れる寛容さなど、日本社会に足りないものがブラジルにあった。

その魅力をかすませるような問題を放置したまま装飾を重ねてほしくはない。ブラジルには人に優しい社会づくりを波及してほしいと思うのは、ブラキチの独り善がりだろうか。

## &lt;Profile&gt;

しぶや・あつし

1975年大阪府出身。高校生の時にベトナム戦争の写真を見てフォトジャーナリストを志す。大学在学中にブラジル・サンパウロの法律事務所での研修しながら本格的に写真を撮り始める。2002年London College of Printing(現ロンドン芸術大学)卒業。現在は東京を拠点に、紛争や貧困の地で生きる人々の姿を写真と言葉で伝えている。MSF(国境なき医師団)フォトジャーナリスト賞、日本写真家協会展覧会賞などを受賞。共著に「ファインダー越しの3.11」(原書房)。



# ペルシヤの誇り



第2の都市マシュハドで、歩きながら新聞を食い入るように読む女性。イスラムの国だが、女性の社会進出は著しい。ホテルやオフィスで働き働く女性たちに“閉ざされた”イメージはない





古都シラーズの靴屋の店先。日本の空間を生かした商品陳列とは正反対で、店内をびっしりと埋め尽くすのが流儀なのだろうか



シーア派の聖地マシュハドでは、黒いチャドル姿の女性が圧倒的な存在感を放つ。それに反して子どもたちの派手さが楽しいコントラストを見せる

初めてイランを訪れたのは、1996年だった。当時は日本からの個人旅行など極めてまれで、やっとのことで入手したビザを頼りに空路で首都テヘランへ向かった。現地の空港では、入国審査に並ぶ見慣れぬ人々の行列に、不安な思いでいっぱいになったのを覚えている。

80年から8年にわたって続いたイラクとの戦争は、今でも世界の記憶に深く染み付いている。やっとな終結したかと思いきや、大量の労働者が日本に出稼ぎにやって来て、都内の公園はイラン人であふれた。その群衆の姿は連日メディアに流れ、実体的ないマイナス・イメージとして日本人の頭に焼き付いた。

そんな不安から始まった旅。しかしすぐに、準備した警戒心はあっけなく消え去った。全く想像しなかった、イラン人の明るさ、親切さに触れたからだ。総じて中東の人々は外国人に親切だと思うが、イラン人は中でも紳士的で、物腰が柔らかくて上品さがあるように感じた。

また幾度となく「日本人なのか。うちで夕食を食べないか」と声を掛けられた。彼らは大変な親日家だ。



[右]バザールは女性たちのパラダイス。衣料・装飾品や日用品など、何でもそろふ。品物選びの真剣なまなざしに洋の東西はない  
[左]古い町では伝統工芸が盛ん。イスファハンの職人街の彫金師は撮影の依頼に少しこちらを見て黙々と作業を続けた

かつて日本に渡った労働者たちが、日本の美しさや日本人の親切さを伝えてくれたのだ。日本に『イランのマイナス・イメージ』を残した人々が、イランでは『日本のプラス・イメージ』の発信源だったのである。



滝つぼの即席テラスでピクニック。テヘランの北に連なるエルブルズ山脈は、重要な水源であり、市民の憩いの場としても人気だ



ザグロス山脈でハイキングをする男性たち。食事マナーも客人優先。車座ながら、みんな礼儀正しい





世界遺産にも登録されているイсфаハンのイマーム広場。17世紀の街並みに馬車が似合う



南西部カーゼルン近郊を走る道路。大渋滞の犯人である牧童は至って涼しい顔だった



イラン人は大のコメ好きで、各地に水田が点在する。カスピ海南岸のサリの水田風景はまるで日本だ



カスピ海沿岸の町に広がる広大な麦畑。日焼けした農民たちは、控えて紳士的な笑顔を見せてくれた

イラン人は「ペルシャはアラブと違う」といったことをよく口にする。確かにペルシャ語は「インド・ヨーロッパ語族」で、「セム語族」に属するアラビア語とは異なる。だが、彼らが伝えたいのはそういうことではない。同じイスラムの国でありながら、ペルシャだけが持ち得る歴史的な誇りだ。

の「傲慢」になっているが、実際は、アレクサンドロスが領土を引き継いだに過ぎない。この15年、訪れるたびにイランは変化した。この国はさまざまな困難に直面し、今はグローバリゼーションの波が絶え間なく押し寄せている。豊富な観光資源を求めて外からの来訪者も増え、西側の風が吹き込み始めた。しかしどんな変化が起きようとも、ペルシャの地に根差した誇りは消えることがない。そして日本人としては、同様に親日家としての一面も持ち続けてほしいと願うばかりである。



シラズ近郊にあるアケメネス朝の象徴ともいえる王都ペルセポリス。床は切石が高さ12～14メートルに積み上げられ、広さは300×400メートルもある



人々が集まる憩いの場といえば

## トチャール山



休日は自然の中でケバブをほおぼる。ラフな格好でのんびり過ごす穏やかな時間

「Berim 'Baam'e Tehran! (テヘランの屋根に行こう!)」。そう誘われたら、あなたも立派な地元っ子。イランの首都テヘランでは、車にチャイやケバブを積んで、家族や友人とピクニックやハイキングに出かけるのが人気の休日の過ごし方だ。

特におすすめのスポットが、“テヘランの屋根”と呼ばれるトチャール山。市街地から麓までは車で30分ほどで行ける。盆地のため風があまり吹き抜けず、車の排気ガスなどによる大気汚染が深刻になってしまっ

たテヘランだが、トチャール山ならきれいな空気を楽しめる。夜にはテヘランの夜景を一望できるのも人気の理由だ。

山頂のスキー場へは、世界一標高が高く、世界一長いといわれる全長7,500メートルのゴンドラが運んでくれる。冬には若者たちで大にぎわいだ。砂漠の国のイメージが強いイランだが、実は雪質の良さは折り紙付き。ヨーロッパの一流スキー選手が、お忍びで練習に来ることもあるとか。



イランのイメージを覆す白銀の世界。スキーはまだまだお金持ちのスポーツだ



サフランで色付けた水砂糖などと一緒に、いつでもどこでも熱い紅茶を飲むのがイラン流

取材協力：筒井清香 (元JICAイラン事務所 企画調査員)

地球ギャラリー

## イランの文化を 知ろう!

イラン料理の味の決め手はハーブとスパイス。肉の串焼きやシチュー、コロッケなどに、ミントやバジル、クミン、コリアンダーなどを加えることで、独特の香りや酸味が出る。

そんな香辛料の中で、少し高価だけれど人気があるのがサフラン。イランでは3,000年以上も前から栽培されてきたといわれ、今もなお、世界の生産量の9割を占める。さわやかな香りと鮮やかな黄色が、今も昔も好まれている。

イランの代表的な料理の一つ、「モラッサ・ポロ (シーリン・ポロ)」はサフランを使った炊き込みご飯。“飾られたご飯”という意味で、日本の散ら

し寿司のように、盛り付けにこだわるのがポイント。ペルシャじゅうたんのような幾何学模様にも具を並べていくのが一般的で、お祝い時の食事の定番になっている。味付けは薄めで、サフランの香りや果実の酸味がより楽しめる。

そんなイラン料理を豊富に取りそろえるのが東京・阿佐ヶ谷のレストラン「ジャーメ・ジャム」。「食を通してイラン文化を紹介したい」と、店主のモーセン・キャラバンディさんが腕を振るう。

イラン料理といえば  
さわやかな香りの  
炊き込みご飯

## モラッサ・ポロ



### 【RECIPE】

#### ●材料(4人前)

鶏肉800g / コメ500g / アーモンド50g / オレンジの皮100g / レーズン50g / ビスタチオ50g / サフラン 小さじ2分の1 / 塩コショウ 少々

- 鍋に分量の半分のコメとサラダ油、お湯を少量入れたら、ゆでておいた鶏肉を乗せ、残り半分のコメ、細かく砕いたアーモンド、オレンジの皮、塩コショウを入れる。
- ①に鶏肉のゆで汁を少量加え、さらにお湯に溶かしたサフランを入れる。
- ②にふたをして、弱火で約30分煮込んだら、レーズンと細かく切ったビスタチオを加えて混ぜる。
- ③にバターを乗せて溶けたら出来上がり。

### 【SHOP INFORMATION】



#### ジャーメ・ジャム

〒166-0004  
東京都杉並区阿佐谷南2-20-7  
TEL: 03-3311-3223  
営業時間: 17~24時、年中無休  
URL: www.jamejam.jp/



# ／ 新着情報 ／ イ チ オ シ !

## M OVIE

### 『バルフィ! 人生に唄えば』

生まれつき耳が聞こえず、話すこともできないインドの青年バルフィ。身振り手振りや視線で感情をストレートに表現する彼に、2人の女性が恋に落ちた。資産家の男性と結婚し何不自由なく暮らすシュルティと、バルフィの幼なじみで人とうまく付き合えず心を閉ざしていたジルミル。時に言葉の壁や身分の差に苦しめられながらも、バルフィの優しさに触れながら、彼女たちの人生が変わり始める。



© UTV Software Communications Ltd 2012

2012年/インド/151分  
監督: アヌラーグ・バス  
出演: ランビール・カプール、プリヤンカー・チョープラー、イリヤナー・デクルーズ他  
公開: 8月22日(金)よりTOHOシネマズシヤンテ(東京)他 全国順次公開  
URL: barfi-movie.com/  
配給: ファントム・フィルム

## E VENT

### 『グローバルフェスタJAPAN2014』

今年で24回目を迎える国内最大級の国際協力イベント。テーマは、「Smile Earth! 地球の明日へ“笑顔”のタネまき!」。国際機関や政府機関、NGO、民間企業などが集結し、ブースの出展やワークショップの開催、各国料理の提供などを通して、開発途上国の現状や国際協力の取り組みを紹介する。メインステージでは、今年3月にカンボジアを訪問したアーティストの倉木麻衣さんによるトークショーや、ロックバンドのアンダーグラフによるスペシャルライブなどが予定されている。盛りだくさんの2日間、国際協力の世界をのぞいてみよう。

会期: 10月4日(土)、5日(日) 10~17時  
会場: 日比谷公園(東京)  
問: グローバルフェスタJAPAN2014実行委員会事務局  
TEL: 03-5355-0700  
URL: www.gfjapan2014.jp/

## B OOK

### 『戦争の現場で考えた空爆、占領、難民 カンボジア、ベトナムからイラクまで』

1980年からインドシナ難民の救済活動に取り組み、その後もアジアやアフリカの紛争地域などで人道支援や難民救済に力を注いできた著者。ポル・ポト政権崩壊後、NGO職員としてカンボジアに入国して水が行き届いていない地域で井戸掘りをしたり、イラク戦争勃発直後には、紛争の爪痕が残る過酷な環境の中で医療支援に奔走した。本書では、著者が30年にわたる自身の活動を振り返り、現場で見たもの、各地で出会った人々の声などを届ける。



熊岡路矢 著  
彩流社  
2,052円(税込)

この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

## B OOK

### 『ミャンマーのすてきな手仕事をめぐる旅』

135もの民族が存在するといわれる多民族国家、ミャンマー。異なる文化を持つ人々が暮らし、身にまとう伝統衣装もまた多彩だ。そんなミャンマーの刺しゅうや織物に魅せられて、手芸作家の著者が現地へ飛んだ。東部の村で出会ったのは、カラフルな刺しゅうの帽子や、ビーズ細工が施された衣装を着るアカ族。北部では、カチン族が伝統のひし形の柄を布に織り込んでいた。現地の人々の作業風景をレポートしながら、それぞれの布の織り方も紹介。きめ細やかな手仕事から、人々の温かさが伝わってくる。



春日一枝 著  
グラフィック社  
1,728円(税込)

この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ



国際協力を楽しむ秋

暑さの中にも時折、秋の気配が感じられるようになりました。夏バテ気味だった体も元氣を取り戻すこの季節、食欲の秋、スポーツの秋、芸術の秋など味わい方はさまざまですが、今年は「国際協力の秋」を楽しんでみてはいかがでしょうか。

10月6日は「国際協力の日」です。日本は60年前のこの日、アジア・太平洋地域の開発途上国を支援する国際機関「コロンボ・プラン」への参加を決め、翌年から、途上国からの研修員受け入れや日本人専門家の派遣などを通じた技術協力を開始しました。例年この前後に、国際協力に関連したイベントが各地で開催されます。

今年には国際協力60周年を迎えることもあり、これまで以上に多彩な企画が検討されています。その一つ、10月4、5日に東京・日比谷公園で開催される「グローバルフェスタ JAPAN 2014」は、今年で24回目を迎える国内最大級の国際協力のイベント。国内のNGOや各国大使館、国際機関、民間企業などがそれぞれの切り口で国際協力について紹介します。その他にも、コンサートやトークイベント、各国の料理や雑貨の販売など、幅広い世代が楽しめる企画が満載です。また10月25、26日には、名古屋で「ワールド・コラボ・フェスタ2014」が開かれます。その他にも、全国16カ所にあるJICAの事務所では国際協力に関する各地のイベント情報をホームページで発信していますので、ぜひご確認ください。

国際協力への関わり方は多種多様です。こうしたイベントを通じて、国際協力をより身近に感じていただき、それぞれの興味・関心に合った国際協力の形を見つけていただければと思います。

広報室長 西野恭子

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2014年10月15日

Eメール：jica@idj.co.jp  
FAX：03-3221-5584（『mundi』編集部宛）

- ① カンボジアのクロマー
- ② 書籍『戦争の現場で考えた空爆、占領、難民  
カンボジア、ベトナムからイラクまで』（p37参照）
- ③ 書籍『ミャンマーのすてきな手仕事をめぐる旅』（p37参照）



①



②



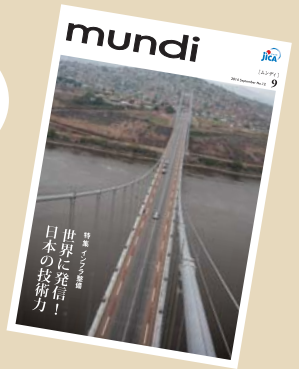
③

本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします（入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください）。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2014年10月1日発行予定)

地域発の国際協力

私たちの日々の生活を支えるさまざまな知恵や技術。実は、開発途上国が直面する課題解決に貢献できるものも多い。そんな日本の地域の強みを生かした“日本も世界も元気になる国際協力”を紹介します。





©Yuki Asada

## コットンが生み出す未来

大地に点在する高床式の住居。そのそばの田畑で、家族のために、朝からせせとコメや野菜を作る女性たち。カンボジア南西部、首都プノンベンから約150キロのカンボット州の村に広がる日常だ。

青年海外協力隊OGの松島愛さんは、この村で2年間暮らす中で、あるアイテムが気になっていた。現地の人たちの日々の生活に欠かせない“クロマー”と呼ばれるチェック柄に織り込まれた布だ。

頭や首、腰に巻くのもあり。タオルや風呂敷としても、使い勝手が良い形だ。使い古したものは、足ふきマットとして大活躍。日本の手ぬぐいとどこか似ている。

そのクロマーを使って、外で仕事を

ることが難しい村の女性たちを助けた。松島さんは村の職業訓練校の教員や生徒たちと協力して「Tau mock <sup>タウ</sup> <sup>モック</sup> <sup>テイ</sup> <sup>エフト</sup> tiet」を立ち上げた。クメール語で「もっと前へ、もっと未来へ」の意味。綿100%のクロマーを織る技術を身に付け、自分たちで生計を立てられるようになってほしいという願いを込めた。

「今は、身の回りにある植物で染料を作って糸を染めて、織物にする技術をみんなで学んでいます」と松島さん。手織り独特のふんわりとした肌触りが特徴。日本でも販売を始めている。

自然の恵みから生まれた優しい色合いのクロマー。生活のあらゆるシーンでお役立ちアイテムになりそうだ。



手触りの良い布は、女性たちの丁寧な仕事のためものだ

★クロマーを2人にプレゼント！→詳細は38ページへ

★Tau mock tietの商品は、ホームページ([www.tau-mocktiet.com/](http://www.tau-mocktiet.com/))から購入可能。



カンボジア  
カンボット州





私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 47

## PROFILE

1970年アメリカ・コロラド州出身。ハーバード大学比較宗教学部卒業後に来日。福井県で英語講師として過ごした後上京し、役者の道へ進む。97年にお笑いコンビ「パッケンマッケン」を結成。テレビやラジオ出演をはじめ、執筆活動や映画の字幕監修など幅広く活躍。2012年より東京工業大学非常勤講師。出演番組に『未来世紀ジバンク』（テレビ東京、毎週月曜22時〜）など。

実は20数年前に日本に来るまで、全く日本には興味がなかったんです。それどころか、海外ですらメキシコとの国境を10分くらい越えたことがあるだけ。外の世界とは無縁の生活を送っていました。

ところが大学卒業後、人生が大きく変わりました。中学の時から親友が日本で英語を教えることになり、一緒に行ってみないかと誘われたのです。その時、彼が別の国に行くと言ったら、日本とは一生縁がなかったかもしれません。そう思うとこれは運命だと思います。

それまで抱いていた日本のイメージは、暗くてまじめ、勤勉なサラリーマン。でも実際に来てみて、大きく変わりました。みんな楽しくて、優しい人ばかり。自然もきれいで食べ物もおいしく、一気にこの国が好きになりました。最初は日本語はできなかったのですが、周りのみんなが先生ですから、毎日誰かと話すこと全てが勉強でした。最初の2年半を過ごした福井は僕にとっての青春です。

日本で生活することで、生まれ育ったアメリカについても発見がありました。宗

教一つ取ってもそう。小さい頃から道徳は宗教とつながっているという教えを受けてきましたが、日本は人がやるべきこととして考えています。銃もみんなが当たり前のように持っていたけれど、完全になくなってしまう安全な社会をつくることできる。それは全て、母国を離れなければ気付かなかったことです。

最近プライベートでは、アジアの国々によく足を運びます。とても優しく人なつこい人が多く、子どもを見る目が優しいのが印象的です。そして、特に強く感じるのが生命力。スラムで雨にさらされて暮らしている人たちなど、厳しい環境の中から生まれた力強さがあります。

また西洋化しながらも、それぞれの国の味や雰囲気の色濃く残っています。日本もアメリカも、先進国はどこか均一化されてしまっていて、個性を失いつつあり、開発途上国の伝統を守り続ける精神を見習わなければならないと思います。

でも、やはり気になる場所もたくさんあります。その一つが治安です。貧しさ故に起こる問題でもありますが、腐敗し

## 国際協力で世界を平和に

## タレント パッケン

Patrick Harlan



た社会はやはり変えていかなければならない。賄賂や犯罪は、本人はもちろん、家族や地域、国など、誰のためにもなりません。衛生環境や感染症も心配です。そのような課題一つ一つを、日本の経験を生かして解決している国際協力の取り組みは素晴らしいと思います。

世界各地で日本人が現地の人に寄り添い、汗を流して活動しているのには本当に頭が下がります。そのように国際協力を通じてさまざまな国と信頼関係を築いていくことは、安全保障にもつながると確信しています。僕も多くの国に足を運んで、現場で何が起きているのかをもっと見て、皆さんと話をしてみたい。途上国から学びながら、成長していければいいですね。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索